

国立国語研究所学術情報リポジトリ

『動詞の意味・用法の記述的研究』の電子化と印象 評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-07-17 キーワード: 動詞, 意味, 電子化, 用例, 印象評価 作成者: 加藤, 祥, 浅原, 正幸 メールアドレス: 所属: 北海道大学, 国立国語研究所
URL	https://doi.org/10.15084/0002000712

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution 4.0 International License.



『動詞の意味・用法の記述的研究』の電子化と印象評定

加藤 祥^a 浅原正幸^b

^a 北海道大学／国立国語研究所 特定客員准教授

^b 国立国語研究所

要旨

宮島（1972）の『動詞の意味・用法の記述的研究』における意味記述と用例の電子化を行った。意味・用法の記述を参照可能な言語資料の基礎として、大規模な動詞用例集として検索を可能とするとともに、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における動詞用例との相互補完や「慣用」用例として比喩表現調査に活用することを目的とし、既公開の電子化資料の修正を行うとともに、新たな情報付与や整備を行った。本研究によって検索用情報が付与され、電子化された用例集としての利活用が見込まれる。本稿では、電子化の目的と電子化版資料に付与した情報を報告し、利活用の可能性を示す*。

キーワード：動詞，意味，電子化，用例，印象評定

1. はじめに

1.1 書籍『動詞の意味・用法の記述的研究』とその研究史的 위치づけ

『動詞の意味・用法の記述的研究』（宮島 1972）と『形容詞の意味・用法の記述的研究』（西尾 1972）は、「現代語の動詞・形容詞の意味・用法を，言語作品のなかで実際に使われた用例によって記述すること」（西尾 1972: 6）を目的とし，それぞれ基本的な動詞と形容詞に関する豊富な実例を収集し，実例に基づいた意味分析を試みた大著である。宮島（1972）は，「辞典における意味の説明は，あまりに短く不完全」であり「結論に到達する根拠（p.1）」が示されず「意味の体系的な関連」がないという問題点を解消するような意味記述を目途とし，方針について「用例だけから意味を帰納しようとすることは，まったく言語的条件だけをたよりにしているものである（p.670）」とする。

これらの書籍が発行された当時，豊富な実例提供によるかなりの精度をもった分析がなされたと評する國廣（1973）は，作例がなく「実例至上主義（p.55）」のために「しかじかの用法があ

* 本稿は 2022 年 5 月 28 日に開催された共同研究プロジェクト研究会において，「『動詞の意味・用法の記述的研究』と「比喩表現の理論と分類」—国立国語研究所報告書の電子化」（発表者：加藤祥）として発表した内容の一部に対し，データ修正や情報付与を行ったものである。また，本研究は国立国語研究所の以下の 3 つの共同研究プロジェクトおよび JSPS 科研費 JP23K21935, JP23K25326, JP22K18483, JP25K00459 によるものである。（）内はプロジェクト・リーダーを表す。

・「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原正幸）のサブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」（浅原正幸）

・同サブプロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」（松本曜）

・「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曾智信）のサブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」（柏野和佳子）

るはずであるが実例はなかった (p. 56)」という記述のあることや、日常語の不足などが生じていることを指摘しながらも、「全体的な鳥瞰が与えられたことは、今後のこの方面の研究を進めるための着実な土台が与えられたことを意味する (p. 52)」とする。

その後、村木 (1995) は本書について、「最大の特徴は、大量の用例にもとづく記述だ (p. 151)」として「客観的な観察」の立場をつらぬいた「徹底的な実例主義」であり、「大量の用例は、言語現象を客観的にしめしてくれるものである (p. 153)」とする。また、実例主義についても、「実例のみから言語のしくみを帰納しよう」とする姿勢や、動詞が「文脈に依存している度合いが大きい」いためにむすびつく語をあわせて考慮することの重要性を評価する。さらに、「言えるか言えないか、文法的か非文法的かといった判定は、互いに排除する二値的なものではなく、中間的なものが存在して連続的であることが多い (pp. 152-153)」との指摘から、「現象のたしかな把握が出発点」であり「本書の発表が契機となって、類義語研究をはじめ語彙論・意味論が発展した (p. 153)」としている。宮島 (1972) の分析が語彙・意味に関わる研究に大きな意義を有していることはもちろんであるが、分析に用いられた大量豊富な用例についても、動詞の意味・用法の記述に関わる資源として着目されるべきであろう。

1.2 書籍『動詞の意味・用法の記述的研究』に対して指摘されてきた構成上の課題

國廣 (1973) は、書籍構成上「同一の単語が幾つかの項にくり返して現われ、ばらばらに記述されたままに終って、全体のまとまった姿をつかみにくい (p. 54)」問題点を指摘する。また、用例についても全体の構成や分布を確認することができないために、「文学作品からのものが多 (p. 56) ¹」い印象となっており、「意味分析の資料として優れた文章、つまり文体ができるだけ等質的でしかも単語の意味が的確に活かされている文章には作家以外の人の手になるものが多い (p. 56)」として、文語²と口語をはじめとする文体的な用法の区別が不十分となっている可能性を指摘している。そのほか、西尾 (1972) においても同様に細かな点とした上で、「本文と例文の見分け (p. 62)」がつきにくいことや、例文には「通し番号が打たれているとなおよかった (p. 63)」ことなども挙げる。これらの指摘における分析対象項目の分散、本文と例文の区別などの書籍構成上の問題点は、紙面上の検索の困難によるものと考えられる。

1.3 電子化によって解決できる課題

以上のように、宮島 (1972) は動詞意味研究における基盤資料として高い価値を有する一方で、紙媒体という制約の下で構成上の課題を抱えてきた。特に、同一見出し語に関する記述や用例が複数の節に散在し、体系的に参照することが困難である点は、後続研究から継続的に指摘されてきた問題である。また、大量の用例の構成（用例が文学作品に偏っているように見えるなど）や、

¹ 実際には、宮島 (1972)・西尾 (1972) はそれぞれ、文学作品 52 作品 (1 作家 1 作品) : 8047 ページ、科学説明文・論説文 : 1409 ページ、『現代雑誌九十種の用字用語 第一分冊 総記および語彙表』(国立国語研究所 1962) における「現代雑誌九十種」用例カードおよび「総合雑誌」13 種の用例カードを用いており、文学・論説文 30 万、雑誌 15 万の用例を収集している。

² 1898 年から 1966 年の約 70 年間の用例がある。

分布（用例の年代や文体差）に関する指摘をはじめ、本文と例文の境界が視認しづらいことなど、検索性や可読性の点でも研究利用を妨げる要因が存在した。こうした問題は、紙媒体に依存した情報提示の形式に由来するものであり、原資料の価値を十分に活用する上で大きな制約となっていた。

電子化を行い、書籍構造を適切に反映したデータとして再編することにより、これらの問題は大幅に改善される。とりわけ、用例を行単位で整備し、検索可能な形で統合することは、用例単位で意味の特徴や語の結合を分析する基盤となるだけでなく、後述する印象評定などの計量的なアノテーションを各用例に紐づけて付与することを可能にする。これは、単に記述内容の再現にとどまらず、現代語における語の使用感や慣用性を数量的に把握し、宮島（1972）の記述と対照するための基盤整備として重要である。

このように、電子化は資料の検索性を高めるのみならず、印象評定を含む多様な注釈情報を付与しうる構造的基盤の整備としても不可欠である。

1.4 電子化と印象評定情報が求められた比喩表現用例収集の例

宮島（1972）の電子化が求められた具体例として、比喩表現用例の収集がある。動詞の意味・用法情報と印象評定情報において対照を可能とする用例が、比喩表現の判定や分析に必要とされることによる。

『比喩表現の理論と分類』（中村 1977）は、日本語比喩表現の実態調査を目指し、約 2 万例の豊富な用例を収集した大著である。加藤・浅原（2023）は、既に中村（1977）に掲載されている用例の電子化を行っている。電子化されたデータ（国立国語研究所 2022b）は比喩表現用例集として検索が可能となっているほか、様々なアノテーションを付すことにより、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以降 BCCWJ）に基づく指標比喩表現収集（加藤・菊地・浅原 2020）の基礎資料となり、比喩表現コーパスの構築に際しても対照をはじめとする利活用が可能なデータベースとして公開されている。現在は、さらに中村（1977）を踏まえた現代日本語の比喩表現に関する実態調査を行うため、BCCWJ に対する比喩表現情報付与が進められている。

中村（1977）において、比喩性は A・B・C の 3 類型によって把握された。まず、A 型把握は「あたかも…よう」のような比喩指標となり得る「何らかの言語形式」によるものとされる。しかし、A 型把握であっても、当該表現に比喩性があると判断されるためには「何らかの言語形式」がたしかに比喩表現の指標であることが確認されなければならない。そこで、中村（1977）は、主として B 型把握において、表現を構成する要素間の結合に着目する。結合に慣用からのずれが見られる場合に、何らかの「転換」があるとして比喩性を認める。(1) は、「わかりにくさ」という抽象物が「跳ねかえる」と物体扱いされており、「転換」は「やや慣用的ながら、ずれを感じさせる働きを失っていない」と評価される。

- (1) そしてこのわかりにくさがそのまま徳子自身にはいまの杉下と自分との関係での、ある自省となって跳ねかえてくるのであった。

C型把握は文単位などでは通常の表現であるにもかかわらず、場面や文脈と無縁であるようなディスコースレベルの「ずれ」に着目する。

以上のように、中村（1977）における比喩表現の認定は、「何らかの言語形式」（A型把握）が比喩表現候補を見出す一助となり得るが、主として表現を構成する要素が「慣用」でない（あるいは文全体が文脈と無縁である：C型把握）ことによる（B型把握）。このような「転換」すなわち要素の結合が慣用から「ずれ」ていることを比喩表現の判断の基準とするに際しては、ずれの認識される「慣用」や選択制限を根拠とする必要があるといえる。すなわち、日本語比喩表現の用例収集のためには、基本的な動詞をはじめとする「慣用」用法が必要であり、慣用からの「ずれ」を確認する必要がある。中村（1977）の「結合比喩」は5537例が挙げられ、特に動詞を含む結合³が4254件（76.8%）を占める。

そこで、加藤・菊地・浅原（2020）などは、比喩性の判断の典拠として、宮島（1972）を確認し、「慣用」たる用法の記述を確認することにした。たとえば、中村（1977）において「林が囀る（9244）」が結合比喩として収集されており、宮島（1972）では「さえずる」について「小鳥だけについて」というものだとの選択制限が記されている。結合「林が囀る」は慣用ではない（ために比喩である）ということが確かめられるのである。

しかし、國廣（1973）が指摘したように、宮島（1972）の紙面から該当項目や対象語の記述を確認することは困難である。まずは全文を電子化することによって項目や記述の検索を可能とし、対象語や用法の記述を見つけやすくする必要があった。そして、各用例を個別に参照できるようにすれば、中村（1977）の用例と対照が可能な情報付与を行うことにより、比喩表現の用例ではない「慣用」の用例として利用することができる。参照資料および対照資料として、電子化と情報付与が求められた。

さらに、比喩性の判断をより精密に行うため、慣用的用例そのものの「自然さ」や「わかりやすさ」、「比喩性」の程度といった印象評定を付与することが有効である。中村（1977）の比喩用例と宮島（1972）の慣用例の双方に印象評定を付与して対照することで、

- ・どの程度「ずれ」が比喩として知覚されるのか
- ・ある結合がどの程度自然／不自然に感じられるのか
- ・慣用的結合と比喩的結合の評定差がどこにあるのか

といった点を数量的に把握できる。

このように、宮島（1972）の電子化は、比喩研究における慣用性判断の基盤整備に加え、印象評定を利用した実証的分析を可能にする点でも重要である。

³ 自動詞または他動詞を含む分類が付与された結合例を集計した。

⁴ 中村（1977）の用例番号。

1.5 本研究の目的

本稿では、以上の背景を踏まえ、宮島（1972）の全文電子化と情報付与を行うことを目的とする。特に、比喩性判断・現代語対照・用例の典型性分析など、多様な研究目的に対応できるよう、以下を目的とする。

1. 宮島（1972）の書籍構成を反映した電子化データベースを構築し、見出し語・分類・意味特徴・用例の横断検索を可能にすること。
2. 各用例を行単位で整理し、読み仮名付与、旧字体の統一、検索用例の作成など、コーパス的利用に耐える形式へ整備すること。
3. 主に比喩表現との対照を可能とするため、動詞用例における結合情報を抽出し、慣用的結合・非慣用的結合の比較を可能にすること。
4. さらに、各用例および各結合について「自然さ・わかりやすさ・古さ・新しさ・比喩性」からなる印象評定を付与し、慣用性の強弱や比喩性の度合いを数量的に把握できる基盤を整備すること。これにより、宮島（1972）の記述・BCCWJの現代用例・中村（1977）の比喩用例を統合的に比較できる。
5. 上記の電子化資料を BCCWJ の動詞用例と連携させ、現代語の用例との相互補完を可能にすること。

以上の取り組みにより、宮島（1972）を現代の語彙意味研究・比喩研究・用例研究において持続的に利用可能なデータとして再構築し、その学術的価値を一層高めることを目指す。

2. 電子化作業

まず、宮島（1972）の電子化データ（国立国語研究所 2022a）を検索可能なデータベースとして整備するため、書籍構成を反映し、用例の整理を行った。用例を整理するに際し、各用例における結合情報の抽出と付与も行った。

2.1 書籍構成を反映した電子化

宮島（1972）は、「1 対の単語の意味を区別する特徴を「意味特徴」または略して単に「特徴」とよ（p.14）」び、ある文脈ではおきかえが可能な 1 対の単語（または単語群）を比較し、対立において上位下位関係、同位関係、反対の関係などの特徴を記述する。また、これらの特徴間の対立には制約がありうるため、文法的カテゴリとの対応を鑑み、「主体」「対象」「ようす」にまとめる。宮島（1972）の記述例を図 1 に示す。

〔21〕 そそぐくあびせるくかける

「そそぐ」は水その他の液体についてだけいう。

○盆栽に水を灌ぎなどした後、（つゆのあとさき 90）

「あびせる」は、ふつう液体についていう。

○両方の頭へいきなり冷水を浴びせ、背中を蹴上げた。（潮騒 97）

実例には液体のばあいしかなかったが、「あびせる」は、たとえば「砂を頭からあびせる」のように、液体に準ずる、細かい粒のあつまりのようなものについても、いうことがあると思われる。

「かける」は液体のばあいにも、これに準ずる粒状のものにも、また、ひらたいもののばあいにもいう。

○気絶をすれば、水をかけて生かし、それを何度も繰りかへした。（蟹工船 57）

○のこりの金をもとのところにかえし、その上に砂をかけた。（真空地帯・上 138）

○死体の顔の上にかけてある白木綿が除れさうに動いた。（蟹工船 89）

ただし、「そそぐ」は、かならずしも「あびせる」や「かける」の下位にあるとはいえない。「コップにお湯をそそぐ」のようなばあいには、むしろ「いれる」の下位概念である。このような実例はなかったが、

○トロロコンプを椀に入れて、筵節と葱のきざんだのを入れて、それに塩と醤油を入れて熱湯をそそいだけで （むらぎも 29）

のようなばあいには、トロロコンプに熱湯をそそいだ、とも、おわんに熱湯をそそいだとも考えられる。しかし、いずれにしても、液体だけについていう点はかわりない。

なお、「水をかける」のと、「きれをかける」のとは、別の意味とみるべきかもしれない。そうすると、ここにあげる例には、あてはまらなくなる。

図1 宮島（1972）の第1部「1. 主体」「1.1.0.1.2 固体／液体／気体」内の記述例（p. 52）

まず、これらの構成と記述を検索可能な構造化されたデータとするため、本文テキストを人手により以下の見出しに整理した（国立国語研究所 2022a）。

- A 列 連番、- B 列 分類記号、- C 列 分類、- D 列 見出し語対、- E 列 記号、
- F 列 見出し語、- G 列 主体（ひと・もの…）、- H 列 対象（ひと・もの…）、
- I 列 ようす（数・方向…）、- J 列 その他、- K 列 文法・用法、- L 列 意味・用法、
- M 列 備考（頻度情報など）、- N 列～ 用例①～

図1の見出しに対応する部分を図2に例として示す。書籍の構成を反映させながら、列に分割して「本文と例文」を表示する整理を行い、分類や対立関係、見出し語をはじめとする検索を可能とした。対象とする対（群）が異なる場合でも、同見出し語をまとめて閲覧することが可能であるため、「同一の単語が幾つかの項にくり返して現われ、ばらばらに記述されたままに終って、全体のまとまった姿をつかみにくい」問題（國廣 1973: 54）も解消されたといえる。

連番	分類記号	分類	見出し語対	記号	見出し語	対象（ひと・ものの…）	意味・用法	用例①
21	1.1.0.1.2	固体／液体／気体	A<B<C	A	そそぐ	「そそぐ」は水その他の液体についてだけいう。	「そそぐ」は、かならずしも「あびせる」や「かける」の下位にあるとはいえない。「コップにお湯をそそぐ」のようなばあいには、むしろ「いれる」の下位概念である。このような実例はなかったが、このようなばあいには、トロロコンプに熱湯をそそいだ、とも、おわんに熱湯をそそいだとも考えられる。しかし、いずれにしても、液体だけについていう点はかわりない。	○盆栽に水を濯ぎなどした後、（つゆのあとさき90）
21	1.1.0.1.2	固体／液体／気体	A<B<C	B	あびせる	「あびせる」は、ふつつ液体についていう。	実例には液体のばあいしかなかったが、「あびせる」は、たとえば「砂を頭からあびせる」のように、液体に準ずる、細かい粒のあつまりのようなものについても、いうことがあると思われる。	○両方の頭へいきなり冷水を浴びせ、背中を蹴上げた。（潮騒97）
21	1.1.0.1.2	固体／液体／気体	A<B<C	C	かける	「かける」は液体のばあいにも、これに準ずる粒状のものにも、また、ひらいたいのものばあいにもいう。	「水をかける」のと、「きれをかける」のとは、別の意味とみるべきかもしれない。そうすると、ここにあげる例には、あてはまらなくなる。	○気絶をすれば、水をかけて生かし、それを何度も繰り返した。（蟹工船57） ○のこりの金をもとのところにかえし、その上に砂をかけた。（真空地帯・上138） ○死体の顔の上にかけてある白木綿が除れさうに動いた。（蟹工船89）

図2 図1該当部分の電子化例（国立国語研究所 2022a）

たとえば、見出し語「たべる」に関する記述が必要な場合、23節「1.1.0.1.2 固体／液体／気体 A/B<C A たべる」および89節「1.1.1.1.2 動物（人間以外）A<B B たべる」のように分散した記載を確認する必要がある。23節では対象が記述され、89節では主体が記述されているためである。また、見出し語「ふくらむ」は、67節「1.1.1.1 いきもの（人間をふくむ）A<B B ふくらむ」、255節「5.1.1 一時的／永続的 A<B B ふくらむ」、276節「5.2.2 生理的な変化 A/B<C C ふくらむ」にそれぞれ記載があり、対応した用例はそれぞれの節で4例、2例、2例の計8例が掲載されている。電子化されたことにより、このような見出し語に関する記述や用例をまとめて確認することが可能となった。

2.2 用例の整理

書籍を検索可能とするのみではなく、用例集として個別の用例を活用するため、用例を行に分割し、対応する連番、分類記号、分類、見出し語対、記号、見出し語の各項目を付した。また、検索精度を向上させるとともに調査対象としての利用を図るため、旧字体や異体字などの難読語を常用漢字（またはひらがな）に変化させたほか、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた検索用の用例列を追加した。検索用の列中では、見出し語に該当する短単位⁵を【】によってマーク

⁵ UniDic (v2023.3) に則って短単位を認定した。ただし、見出し語は「強要する」「依頼する」など長単位の場合があるため、サ変動詞についてはサ変可能名詞に加え「為る」を含めた箇所をマークすることとした。以下は見出し語が「変化する」の例である。（例）マルクス主義者としてレーニンの日本訳の仕事を宰領するように【変化し】てきてるのか？（むらぎも 114）

した。このほか、見出し語の他にも難読語や特殊な読みについては、読み仮名を付した。(2)では、用例原文における「だらう」が検索用の用例では「だろう」と改められ、見出し語「さわぐ」の該当部分が【】でマークされている。(3)は、見出し語「うずめる」の該当部分がひらがなにされた上で【】でマークされており、「古里(ごり)」「陵(みささぎ)」には読み仮名が付されている例である。

- (2) 用例(原文): 台所で鼠が騒いだんだらうと(雪国 96)(77 節「1.1.1.1.1.1 人間／動物 A<B B さわぐ」)

検索用: 台所で鼠が【騒い】だんだらうと(雪国 96)

- (3) 用例(原文): そこでその屍は何の物語も残さずに、美しい古里の浜と八丈ヶ島を見下ろす陵に埋められたのである。(潮騒 110)(320 節「6.3 目的 A<B B うずめる」)

検索用: そこでその屍は何の物語も残さずに、美しい古里(ごり)の浜と八丈ヶ島を見下ろす陵(みささぎ)に【うずめ】られたのである。(潮騒 110)

さらに、中村(1977)の比喩表現用例との対照を行う目的から、各用例における結合を抽出することとした。作業者は、当該用例において「主体」「対象」「ようす」列に分類された見出し語と最も関係が深いと考えられる要素の結合を抽出し、中村(1977)の結合記述手順によりできるだけ整理した形式(主語と述語の関係の場合は「A が B」の形にするなど)にして記述した。ただし、要素が「塊り」「気」などのように一語のみでは対象が不明瞭な場合は「C の A」(風の塊り、火の気)のように修飾語句などの補足を加えた。作業者が用例中の見出し語と関係の深い要素を特定しきれなかった場合には、複数の要素との結合を抽出した。

これらの作業の結果、たとえば(4)では「花を絶やす」、(5)では「席にありつく」が抽出された。また、(6)のように「子どもと戯れる」「彼が戯れる」のように複数の結合が抽出された場合もある。

- (4) 果樹園は東南に向って開き春夏秋と花を【絶やさ】ず、(厚物咲 23)
 (5) 五百助も、やっと、端の席に【ありつい】た。(自由学校 140)
 (6) 遊戯の時間なぞには、彼は久しぶりで、子供と一緒に心から【戯れる】ことが出来た。(波 185)

本作業により、宮島(1972)に掲載のあった 3870 例が整理され、それぞれの用例には検索用例および用例から抽出された見出し語を含む主要な結合(計 5284 例)が付与された。

3. 情報付与作業

資源としての活用を図るため、BCCWJ との相互補完や比喩表現データとの対照を可能とする情報として、BCCWJ-WLSP(加藤・浅原・山崎 2019)や中村(1977)の電子化データ(国立国語研究所 2022b)に付与されている印象評定情報の付与を行った。

3.1 用例に対する印象評定の付与

印象評定は、クラウドソーシングサービスを通じて募集した1事例あたり20名以上による自然さ、わかりやすさ、古さ、新しさ、比喩性の5項目についての評定である。印象評定情報はBCCWJにおけるBCCWJ-WLSP(加藤・浅原・山崎 2019)の動詞にも同様の評定が付与されている(加藤・浅原 2022)ため、同見出し語の用例と対照することが可能である。評定値は0～5の6段階評価とし、本論文のデータには値の平均値を付与した。また、宮島(1972)の各用例は「比喩的な」意味・用法であるという記述がない場合、いずれも慣用的な用例であると考えられる。そこで、中村(1977)の比喩表現用例と同様に、各用例と結合に同観点で数値化された情報の付与があれば、慣用的な用例と比喩表現の用例の対照を行うことができる。

用例全体と結合のそれぞれについて、評定実験を行った結果を付与した。用例は複数の結合が抽出された場合もあるため、見出し語と慣用的に結びつく要素の認識が評定者によって異なる可能性がある。そのため、用例全体を提示した場合と結合のみを提示した場合の全てを調査対象とした。実際に、(7)の用例全体における「はみ出す」では、自然さ：3.05、わかりやすさ：3.40、古さ：2.30、新しさ：1.80、比喩性：1.75という評定値が得られたが、本用例からは2種類の結合が抽出されている。抽出された結合の一つ【地中からはみ出す】の「比喩性：2.25」においては用例全体との差が見られた。同用例中の他の結合【土管がはみ出す】の「比喩性：1.60」においては用例全体との差は小さい。複数の結合が抽出されている場合であっても、印象評定を確認することにより、(7)であれば【土管がはみ出す】が【地中からはみ出す】よりも主要な要素と判断した評定者が多いという推測ができる。

(7) 地中から【はみ出し】た土管から、トウトウト、水が流れている。(自由学校 179～180)

結合の印象評定を見ることにより、宮島(1972)の意味・用法記述の「主体」「対象」「ようす」のいずれに関わる要素が当該用例全体の印象とどのように関わっているのか評価されているともいえよう。

3.2 代表義性の付与

宮島(1972)の用例は意味・用法の記述別に挙げられていることはもちろんであるが、異なる見出し語群に見出し語が分類されている場合には別の意味・用法として捉えられていることになる。そのため、同見出し語と考えられる見出し語であっても、たとえば同音語が多義語かという判断が一般的な母語話者とは異なる場合、派生義と考えられると比喩性が非常に高く評定されるなど、結果に差の生じていることがある。(8)は宮島(1972)において「物理的・科学的な変化」の分類で提示された用例であり、「褪める」とも表記されるような例である。比喩性が2.95と非常に高い評価となっていた。(9)⁶は「変化の程度」の分類の用例であり、比喩性は1.40と高くな

⁶ (9)は「かたむける」の用例としても挙げられた例である。「勘次は冷めた湯を幾杯か【傾け】た。」の場合、比喩性の評定は2.15であった。重複して掲載のあった例については、各見出し語で評定値を収集している。

い評価である。

- (8) 座布団も色の【さめ】たメリンスの汚点だらけになったのが一枚、(つゆのあとさき 34) (274 節「5.2.1 物理的・化学的な変化 A<B A さめる」)
- (9) 勘次は【冷め】た湯を幾杯か傾けた。(土・上 34) (285 節「5.3 変化の程度 A<B A さめる」)

そこで、加藤・浅原 (2021) の印象評定による代表義推定を用い、宮島 (1972) の各用例における代表義性を付与した。代表義性を付与したことにより、現代の一般的な日本語話者による見出し語ごとの意味・用法の認識を確認できる。

宮島 (1972) の用例における動詞の代表義性値は、最大 2.16、最小 1.97 であったため、(8) の代表義性は 1.97 で最低であり、(9) の代表義性は 2.07 で高いといえる。「さめる」は、「変化の程度」分類のほうが「物理的・化学的な変化」よりも代表的な分類であると考えられる。なお、「変化の程度」の「さめる」に挙げられている用例は 4 例あるが、同分類の用例間における代表義性 (平均 2.06) に差はなかった。しかし、同分類群の用例間においても、たとえば「変化の程度」における「ぬれる」では 10 例が挙がり、(10) の代表義性は 2.12、(11) は 2.06、(12) は 1.99 というように、差の生じている場合もある。「変化の程度」分類における「ぬれる」においては、(10) が最も代表的な用例であると考えられる。

- (10) 雨に【濡れ】たアスファルトの大通りは、人通りも少なく (くれない 109)
- (11) スチームの温みでガラスがすっかり水蒸気に【濡れ】ているから、(雪国 9)
- (12) 廊下も教室も、じっとりと空気が【濡れ】て、重たくなっていた。(人間の壁・上 274)

宮島 (1972) は (12) について「「空気がぬれる」という例が 1 例だけあった。このばあいには、おそらく、ふつう「空気がしめって」と表現する状態よりも多くの水分をふくんでいること、その空気にさわっただけで、からだがぬれそうに感じられることを、あらわしているのだろう。(pp. 416-417)」と記述している。用例が少ないことや「ぬれそうに感じられる」ことなどの指摘があり、「ぬれる」は「しめる」に対して、水分がより多く含まれた状態についていう。(p. 415)」や「内部に水分を含みにくいものについては、ふつう「ぬれる」がつかわれる。(p. 416)」との記述からも、(12) の代表義性が低くなるとわかる。(10) と (11) の違いは記述されていないが、ぬれる原因となったものが「雨」と「水蒸気」である違いや、ぬれているものが「アスファルト」と「ガラス」である違いなどが代表義性に関わっている可能性が考えられる。付与された代表義性を用いることにより、見出し語群の分類間および各用例間の違いを検討することが可能である。

4. 印象評定情報に見る用例の傾向

付与した情報に基づき、宮島 (1972) に掲載された用例の傾向を示す。まず、現代語の BCCWJ-WLSP の用例との対照を行いながら、現代の一般的な日本語話者による動詞の意味認識の傾向との関係を確認する。さらに、慣用の用例 (比喩表現ではない用例) として中村 (1977)

の比喩表現用例との対照を行った。

4.1 BCCWJ の動詞用例との対照

まず、用例の本文（3870 例）における見出し語および結合（5284 例）の印象評定の平均値を表 1 に示す。

表 1 動詞用例に対する評定平均値

	用例数	自然さ	わかりやすさ	古さ	新しさ	比喩性
結合	5284	3.28	3.22	2.44	1.66	1.88
本文	3870	3.13	3.11	2.50	1.64	1.84
宮島（1972）計	9154	3.22	3.17	2.46	1.65	1.87
BCCWJ	38004	3.92	3.87	1.81	1.37	1.16

対照のため BCCWJ-WLSP における短単位動詞の評定値（加藤・浅原 2022）をあわせて示した。BCCWJ の動詞に比べ、特に古さが高く評定されていること、自然さとわかりやすさが低く、新しさと比喩性が高く評定されているという傾向が確認される。自然さとわかりやすさ、古さについては、(13) の「(縄を) なう (古さ: 4.15)」, (14) の「(風呂を) もらう (古さ: 3.95)」など、用例の年代の違いによることが大きいと考えられる。BCCWJ にも (15) の「給え (古さ: 4.30)」のような例があるものの、基本的な動詞の用例ではないことや書籍サンプルの一部に限定的であるために差が生じている。

(13) 隣の雇人は夜なべの縄を【なっ】ていた。(土・上 21)

(14) その晩勤次は二人を連れて近所へ風呂を【貰い】に行った。(土・上 87)

(15) まあ、安心して待ってい【給え】。(PB49_00007, 12900⁷)

新しさと古さは平均値において BCCWJ より高めとなったが、この 2 種の評定は分散も少なく、中央値においても同様の差となっている。全体的に宮島（1972）の用例が古く、現代の一般的な日本語話者が目にしにくい用例であることから、新しさと比喩性に対して少し高めの評定がつけられたものと考えられる。

宮島（1972）において用例の見つからなかった意味・用法のあることが、國廣（1973）の指摘する「実例至上主義 (p. 55)」の問題点とされるが、同見出し語における BCCWJ の用例とあわせることで、各見出し語の用例を対照することが可能となった。印象評定値や代表義性を確認し、BCCWJ の動詞用例が宮島（1972）のいずれの分類に該当するのかを判定することや、宮島（1972）の意味・用法の記述を参照することもできる。

たとえば、宮島（1972）には「もどる」の用例 7 例が「最初の出発点に対する方向」（3 例）と「結果の評価」（4 例）の 2 分類に挙げられている。代表義性の最も高い (2.09) 用例は「最初

⁷ BCCWJ の用例については、出典としてサンプル ID と開始位置を示す。

の出発点に対する方向」分類の(16)であった。

- (16) そして、ふいと思いついて、俊樹は道を【戻っ】て、再び牛木家の門をあけて、入って行った。(帰郷 121)

また、BCCWJ-WLSP には「もどる」の用例が 46 例ある。代表義性の高い⁸用例は「席に戻る (2.17, 2.15 など)」「部屋に戻る (2.15)」「家に戻る (2.15)」「トイレから戻る (2.15)」であり、宮島 (1972) の「最初の出発点に対する方向」分類であるとともに、いずれも具体的な場所の例である。代表義性の高い分類の用例を取得できる見出し語については、慣用としての用例を追加することが可能といえる。ただし、現代語の動詞として使用されにくく、宮島 (1972) の見出し語の用例が BCCWJ-WLSP からは 1 例も取得できない場合 ((13) に見た「絢う (なう)」など) もある。

4.2 中村 (1977) の用例 (比喩表現) との対照

宮島 (1972) の用例にも比喩表現の例や比喩的な転用を含む意味として分類される例もある。しかし、中村 (1977) が慣用からずれの確認された用例のみを収集したのに対し、宮島 (1972) では、比喩表現も含めた慣用としての用例が収集されているものと考えられる。ここでは、慣用と慣用からずれの確認された例としての比喩表現の対照を試みる。

表 2 に中村 (1977) に挙げられた用例に対して付与された印象評定値の平均を示す。中村 (1977) の用例は、結合比喩は結合のみであるが、指標比喩は文全体の掲載があるため、本文および抽出した結合のそれぞれについて調査を行った。表 1 と対照することにより、表 2 における慣用からずれのあるとされたいわゆる比喩表現は、比喩性と新しさが高く評定され、自然さ・わかりやすさ・古さが低く評定されていることが明らかである。

同見出し語の含まれる結合用例の比喩性を見ると、たとえば「死ぬ」では、(17) の中村 (1977) における擬生化例の「風が死ぬ」は特に高いのをはじめ、(18) の換喩例の「指が死ぬ」も平均値より高く、「死ぬ」を含む結合用例における平均が 3.03 であるのに対し、(19) (20) の宮島 (1972) における「人が死ぬ」「原因 (水の難) で死ぬ」などは低く、「死ぬ」を含む用例の平均は 1.46 であった。慣用かどうかという判断の差が比喩性の評定においてたしかに現れていると確かめられる。

⁸ 代表義性の低い用例では「いつもの様子に戻る」「白紙に戻る」など「結果の評価」に分類されると考えられる例が見られる。

表2 中村（1977）の比喩表現用例に対する評定平均値

	用例数	自然さ	わかりやすさ	古さ	新しさ	比喩性
結合比喩	5542	2.37	2.30	2.47	1.82	2.54
指標比喩用例本文	943	2.39	2.29	2.76	1.70	2.60
指標比喩における結合	1495	2.51	2.45	2.47	1.85	2.55
中村（1972）計	9351 ⁹	2.45	2.38	2.49	1.83	2.54

- (17) 風が死ぬ（比喩性：4.00（中村（1977）結合 1222））
 (18) 指が死ぬ（比喩性：3.10（中村（1977）結合 1224））
 (19) 人が死ぬ（比喩性：1.10（宮島（1972）「死ぬ」））
 (20) 水の難で死ぬ（比喩性：1.65（宮島（1972）「死ぬ」））

宮島（1972）の慣用の用例においても、比喩性が高く評定された結合は比喩的な表現（慣用からずれた）例として挙げられた例であった。たとえば、最も比喩性が高く評定された（21）および同じく「さわぐ」の用例である（22）については、「植物や無生物についても「さわぐ」がつかわれている例がある。（中略）これらの例は、比喩的といえるかもしれないが、もし「はしゃぐ」がここでつかわれていれば、いっそう比喩的な感じがするだろう。要するに、ともに人間以外の動物についてもつかわれるとはいえても、「はしゃぐ」の方が「さわぐ」よりもその範囲がせまく、高等な動物にかざられるのである。」（宮島 1972: 113）と記述されている。宮島（1972）における比喩性の高い用例、比喩的であると記述された用例については、比喩表現用例として取得することが可能となったといえる。

- (21) 木の葉が騒ぐ（比喩性：3.70（宮島「騒ぐ」））
 本文：さっと風が吹いて通る、木の葉がざわざわと【騒ぐ】。（平凡 21）（比喩性：2.75）
 (22) 水が騒ぐ（比喩性：3.35（宮島「騒ぐ」））
 本文：水はその柵を乗り越すために、湧上り湧上りして【騒い】でいた。（田園の憂鬱 86）（比喩性：3.00）

なお、（21）（22）のような比喩性の高い用例では、本文と結合で比喩性の差が見られる傾向がある。用例全体における動詞の評定値は、文中の自然な表現として読まれることや、動詞のみの評定であること、慣用からずれのある結合部分がわかりにくくなることなどにより、低めに評定されるようである。表2における指標比喩の用例本文と結合では、用例本文における指標による

⁹ 結合比喩の「結合」の一部には、用例のわかりやすさのために補足情報が小書きで付されている場合がある。ここでは、補足情報の場合の結合（1371 件）に対する評定値についても合計平均に含めた。たとえば「テレビがでんとすわる」の「でんと」部分は小書きであるため、宮島（1972）の用例から抽出した結合との対照から「テレビがすわる」という結合についても調査した。なお、補足情報の有無については、「テレビがでんとすわる」（自然さ：2.90、わかりやすさ：3.05、古さ：2.70、新しさ：1.60、比喩性：2.65）と「テレビがすわる」（自然さ：1.75、わかりやすさ：1.55、新しさ：2.10、古さ：2.10、比喩性：2.60）に見られた違いのように、特にわかりやすさ、次いで自然さに補足情報の影響が確かめられている。

比喩性把握によって比喩性の認識が高まるため、結合よりも用例本文の比喩性が高めに評定されている。比喩表現の種類による違いなども考えられることから、今後、用例と用例中の結合の対応が確認できる宮島（1972）の用例集を活用した分析が求められる。

5. おわりに

宮島（1972）の電子化を行い、動詞の用例集としての検索や意味・用法の記述を参照するなどの利活用を目的としたアノテーションを行った。國廣（1973）において指摘された問題点についても、いずれも電子化および情報の拡充によって対応ができたと考えられる。まず、宮島（1972）の紙面構成を反映させたデータベースとして整理を行うことで、同見出し語をまとめた閲覧が可能になった。分類や見出し語、用例ごとの検索もできるようにした。さらに、BCCWJ-WLSPの動詞と同様に、用例における見出し語に印象評定情報を付与した。これにより、BCCWJの用例との対照を行うことや、互いの用例を補完や拡充に用いることができるようになった。

また、中村（1977）の日本語比喩表現の網羅的収集手法を踏襲した比喩表現実態調査のためには、慣用からのずれを認定する必要がある。宮島（1972）の記述は慣用の確認に有用であり、電子化による検索が可能となったことで、比喩表現用例の収集に活用できるようになった。同時に、中村（1977）が慣用からのずれを「結合」として比喩表現把握に着目することから、宮島（1972）の用例においても、用例ごとに「結合」の付与も行った。慣用の用例と慣用からずれのある用例を対照できるようになった。用例全体を参照できる慣用の結合用例集が得られたということでもあり、今後の比喩表現研究の展開も期待される。

なお、西尾（1972）は、形容詞の動詞との違いについて「異なり語の数¹⁰」と組み合わせの少なさ、性質上あり得ない項目やとりだしにくい場合があること、格支配現象の少なさ、単語間の階層関係の乏しさ、主観性（判断・評価）による不一致性、具体性に欠けることを挙げ、動詞と同じ方式での記述が困難であったとする。そのため、形容詞は動詞と完全に同様の構成ではないが、今後同様に電子化を進める予定である。

参考文献

- 加藤祥・浅原正幸（2021）「IPAL 用言例文への印象評定情報付与と代表義・典型用例の抽出」『計量国語学』33(3): 178-193.
- 加藤祥・浅原正幸（2022）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する印象評定情報付与」『言語処理学会第28回年次大会発表論文集』1524-1529.
- 加藤祥・浅原正幸（2023）「『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与」『国立国語研究所論集』25: 1-19.
- 加藤祥・浅原正幸・山崎誠（2019）「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の新聞・書籍・雑誌データ」『日本語の研究』15(2): 134-141.
- 加藤祥・菊地礼・浅原正幸（2020）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース」『資源言語処理』27(4): 853-887.
- 國廣哲彌（1973）『国立国語研究所（宮島達夫）著『動詞の意味・用法の記述的研究』、国立国語研究所（西尾寅弥）著『形容詞の意味・用法の記述的研究』』『国語学』95: 52-64.

¹⁰ 形容詞は動詞の8分の1弱の用例数であるという。

- 国立国語研究所 (1962) 『現代雑誌九十種の用字用語 第一分冊 総記および語彙表』 (国立国語研究所報告 21) 東京：秀英出版.
- 中村明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 (国立国語研究所報告 57) 東京：秀英出版.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 (国立国語研究所報告 44) 東京：秀英出版.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 (国立国語研究所報告 43) 東京：秀英出版.
- 村木新次郎 (1995) 「宮島達夫『動詞の意味・用法の記述的研究』」『国文学：解釈と鑑賞』 60(1): 149–153.

関連資料

- 国立国語研究所 (2022a) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 データベース版 <https://doi.org/10.15084/00003668>
- 国立国語研究所 (2022b) 『比喩表現の理論と分類』 データベース版 <https://doi.org/10.15084/00003669>

Digitizing “A DESCRIPTIVE STUDY ON THE MEANING AND USES OF JAPANESE VERBS” and annotating examples with impression ratings

KATO Sachi^a

ASAHARA Masayuki^b

^aHokkaido University / Specially Invited Associate Professor, NINJAL

^bNINJAL

Abstract

This study digitizes the semantic descriptions and example sentences presented in Miyajima (1972), *Dōshi no Imi-Yōhō no Kijutsuteki Kenkyū* [A DESCRIPTIVE STUDY ON THE MEANING AND USES OF JAPANESE VERBS]. Specifically, we revise the previously released digitized data and supplement them with additional information to establish a linguistic resource that enables the consultation of semantic and usage descriptions, and support large-scale retrieval of verb examples. These enhancements facilitate complementary use with examples from the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, support investigations of figurative expressions, and enable comparison with non-figurative (conventional) usages. Consequently, the digitized material is supplemented with searchable metadata, enabling it to function as an accessible example database. This study discusses the objectives of the digitization project, the information incorporated into the digitized edition, and potential applications of the resulting resource.

Keywords: verbs, semantics, digitization, examples, annotation